

## お母さんと歩いた道のり、歩く道のり

橋本美咲

学区外の私は登校班の集合場所まで少し道のりがあるため、一年生の時からお母さんがいつも一緒に歩いてくれた。一年生の頃は、いつもお母さんと手をつないで、いつもお母さんを見上げて話をしながら歩いた。今では同じ目線で話をしている。あの頃のように手をつなぐのは少し照れくさい。お母さんは、「忘れ物ないん?」「今日は何があるん?」「が毎日の口ぐせだ。だんだん「めんどくさいなあ。」と思うことが多くなった。学年が大きくなるにつれて、お母さんと歩くことがはずかしく思うようになった。毎朝、「送っていいこうか?」「というお母さんに「一人で行く。」とそっけなく出て行くようになった。家を出てふり返ると、お母さんは手をふって見送ってくれていた。私も手をふっていたけど、一日、二日といつの間にかふり返らなくなった。お母さんは、私の姿が見えなくなるまで見送ってくれていたのは分かっていたのに、なぜそんなことをしたのか分からない。

「美咲と歩かんようになったら運動不足になるわあ。」と笑っていた。朝からけんかして口もきかなかったこともあった。それでも、雨の日も風の日も暑い日も寒い日もいつもお母さんは一緒に歩いてくれた。そして集合場所から、私の姿が見えなくなるまで見送ってくれて

いたのに。

数十日間、私は一人で道のりを歩いた。お母さんと一緒に歩いていたときは、「あーあめん  
どくさいなあ。」と思っていたのに一人で歩くとんだかさみしい気がした。近所のおばさ  
んたちに、「この頃お母さん見ないけどどうしたん？」とすれ違うたびに声をかけられた。  
そのたびに気持ちがいもやもやした。

いつものように、「送っていいこうか？」と言うお母さんに私はうなずいていた。久しぶり  
にお母さんと道のりを歩いた。なかなか言葉が出なかつた。近所のおばさんたちが、  
「お母さん、久しぶりだねー。一緒によかつたね。」と言ってくれた時、私の中のもやもやし  
た気持ちがすっきりした。

こうしてお母さんと歩く道のりもあと数ヶ月。やっぱりさみしい気もする。数十分ほどの  
道のりだけど、お母さんと一緒に歩いた道のりは本當にうれしかった。お母さんはどう思っ  
ていたのか分からないけど、私と同じ気持ちだつたらうれしいなと思つた。「お母さん、い  
つもありがとうね。」とつぶやいてみた。お母さんは聞こえなかつたのか何も言わなかつた。  
でもほんの少し笑つたような気がした。これからもけんかしたり、きげんが悪くなつたりす  
ることもあると思うけど、卒業するまでもう少し、お母さんと歩く道のりを大切にしたいと  
思つた。

そして今日もお母さんは、集合場所から私の姿が見えなくなるまで見送つてくれる。